

筆順について

一 筆順とは

1 筆順は書き順ともいいう。むしろ書き順というほうが、これから日本語としては望ましい。以下、この文には混用する。

書き順は、字を書く上で一定の順序である。

それは、古人の長い間の研究の蓄積であるから、それにしたがつて書けば能率的かつ効果的である。

2 世には筆順はいらぬ、という説をなすものがある。たとえば「因」は「口大」の順でも「大口」の順でも、ともかく、できあがりが「因」になつていさえすればよいといふのであるが、さて実さいに書いてみると、やはり結局は伝統的な原則による「口大」の順に帰するようである。

3 書き順は、原則として各字について一定しているが、なかには二様（まれに三様）の書き順をもつてゐるものがある（たとえば「馬」または「火」など）。そのさい、ちがつた書き順は互いに「ちがつて」いるのであって、どちらも「まちがつて」いるのではない、ということを、われわれはよほどよく心えておかなければならない。

4 書き順の学習には、まずカタカナの書き順を検討してみるがよい。

カタカナの書き順の原理を正しく身につけていれば、その他のこととはさしてむづかしいことではない。カタカナは漢字の一部分であり、そこには書き順の大原則たる、

- (1) 上から下へ 【例】ニ ミ シン シ
 - (2) 左から右へ 【例】ハ リ ソ ツ
 - (3) ヨコからタテへ 【例】ナ サ ヤ キ
- などが、すでに実践されているのである。

5 筆順は、かい書体と行書体とで共通の一体をなし、草書体は別に一

体をなす。すなわち、草書体の筆順は、全く別の系統に属するものである（たとえば「本」の「木」と「卉」となど）。

それゆえ、かい書体の筆順は、原則として行書体の筆順と一致させるたてまえである。つまり、かい書の筆順を考えるにあたっては、必要に応じて行書体の筆順を参考とするのである。

おなじかい書体の中でも、いわゆる真のかい書体があり、また行書体に近い——というよりもむしろ行書体への筆意をはらんでいる——かい書体もある。大体において、教科書体は前者に属し、書家の書くものは後者に属すが、そのさい、しぜんに筆順が動くもので、たとえば

6 無三画（書きとり的） 三画（書道的）

馬

牛

三画（書道的）

二 筆順の原則

1 単体とへんとでは、書き順を異にすることがある。

（単体の筆順）

牛

仁一

一 一

（牛へん）

耳

亘一

一 一

（耳へん）

文部省の「筆順指導の手びき」には、右の耳へんをも単体と同じ筆順で書くことにしてあるが、それには必ずしも賛成しえない。

（單体の筆順）

カシラとしての筆順

羊

三一

メー二

それで「善」と「美」とでは、その「羊」の書き順がちがうのである。

もとともに、書道的な「善」の字の形では「ヤニヽ口」の筆順となる。ちなみに、カシラもカシムリも、またアン・ニヨウなども、すべて広義のヘンの一種である。というわけは、ヘンとは扁平の扁であつて、すべて単体の広い形を、漢字構成の全体的なつりあい上、平たい形にしたものという意味だと解されるからである。

2 ある字には、まれに二つ以上の正しい筆順がある。その最もいちじるしい例は「必」の字である。

(1) ソレハ

ノレハ、

元来、この「必」の字は「戈」と「八」との合字であるのに、明朝活字の書体では、あたかも「心」にタスキ（ノ）をかけたような形になつてゐるので、一般の人は、しぜんに「心ノ」の筆順で書くことが多い。それから新たに「心ソ」、「」という筆順も生じたわけであるが、もし、あらためて筆順を教えるとすれば、やはり(I)の筆順がいちばんよい。

3 字形の構成のちがいによって筆順がちがつてくる例。

(1) (2)

感（感心） 感（感心）

盛（盛皿） 盛（盛皿）

字形も筆順も、入門的には(1)のほうがよいか、実用的には(2)のほうが早く書けてよい。書道的でもある。

4 字原によつて字形に小差があり、それによつて筆順を異にするものがある。

(字原)

(字形)

(筆順)

キ（右手の象形）ナ（ノー）右有布

ヲ（左手の象形）ナ（ノー）左

かしいが、文部省の「筆順指導の手びき」にも採用している。「右」の字原に属して、實さいには「左」の筆順に所属がえをしている

もの（友——ただし草書では字原どおりの筆順で書く）、および字原はちがうが、結果的に「右」の筆順に所属しているものを左にあげる。

右の筆順の系統に希

左の筆順の系統に友存在

5 シンニュウ（シンニョウ）とエンニュウ（エンニョウ・インニョウ）またケンニヨウというとカギニヨウとは、あとから書く。

近直（軒瓦） 建（車瓦） 県（目） 小（下）

おなじニヨウでも「走ニヨウ」「是ニヨウ」「処ニヨウ」などは、さきに書く。

起（走己） 起（尾貞） 処（丸几） 処（丸几）

6 「火」と「水」 「火」と「水」

火（火） 水（水）

7 「火」と「水」は左右（上）から中への順である。

火（火） 水（水）

火（火）

これに対して「小」「水」などは中から左右（下）への順である。

小（トハ） 系（玄一弓）

当（トヨモ） 泰（夫一火）

水（トハ） 泰（夫一火）

赤（土リ火）

右肩のテンは最後に書く。

7 犬（大）

博（博ニ寸）

伐（代ノ）

8 下にぬけるボウは最後に書く。これは最も重要な一原則である。

中（口）

申（日）

半（吕）

事（耳）

9 下でとまるボウはさきに書く。これは前項に対照して重要な筆順の一原則である。

下でとまるボウはさきに書く。

これは前項に対照して重要な筆順の一原則である。

生 (一 二)
虫 (口 一 二)
(→ 一 二日)

そのうち「書」について、文部省の「筆順指導の手びき」では「三一曰」の書き方をとっているが、これは、「書」を「聿」のように、そのボウを下につきぬけて書く単体と同じ筆順であって、「聿」と「日」の複合した「書」では、そのボウのアシを切って下をとめたのであるから、この原則によつて「ヨ一二日」と書くのが法則的である。

書道的には、ボウを最後に「ヨ二日」一と書くことが多いけれども、これは別格である。もちろん、それはそれとして（すなわち書道的筆順として）認められる。

10 以上は、教科書体に即した——いわば書きとり的な筆順の大綱である。それと、芸術的な習字の本にみえる筆順とで若干ちがつてゐることがあっても、そのどちらかの一つを正しい（一つは正しくない）と思ってはならない。たとえばクサカムリでも、これを「一」一と書くのは書きとり的な筆順である。それよりも「一」「一」と書くのが書道的である。しかるに文部省の「筆順指導の手びき」では「一」の書き方しか教えてないので、あるいは習字の本でも、それだけしかあらわれなくなるのではないかといふことをおそれるが、同書のまえがきにあるように、そうした筆順を誤りだとする趣意では決してない。

筆順には幅がある。いわんや習字の筆順には、いわゆる格に入つて格を出でたものがあるから、よく習字の本を学ぶべきである。

最後に、次に示した「凸」と「凹」との書き方を見れば、およそ筆順と

いうものの性質の一端がゆかいに理解されるであろう。

亞 一 フ 下 エ ベ 亞 亜 (八画)
凸 一 レ マ 田 凸 (五画)

母 王 火 比 母 止 方 斤 戸 𩫗 サ 子 小 井 戸 女

フ 力 ハ 广 土 ト ハ 口 𩫗 ヒ ハ

一 フ リ ト フ 𩫗 ト ト ハ ト ト

一 フ フ フ 𩫗 フ フ フ 𩫗 フ

一 フ フ 𩫗 フ フ 𩫗 フ フ 𩫗 フ

一 フ フ 𩫗 フ フ 𩫗 フ フ 𩫗 フ

一 フ フ 𩫗 フ フ 𩫗 フ フ 𩫗 フ

一 フ フ 𩫗 フ フ 𩫗 フ フ 𩫗 フ

一 フ フ 𩫗 フ フ 𩫗 フ フ 𩫗 フ

一 フ フ 𩫗 フ フ 𩫗 フ フ 𩫗 フ

一 フ フ 𩫗 フ フ 𩫗 フ フ 𩫗 フ

一 フ フ 𩫗 フ フ 𩫗 フ フ 𩫗 フ

部首の筆順

ノ ノ ト ノ リ ノ ト ノ リ ノ

一 フ フ 𩫗 フ フ 𩫗 フ フ 𩫗 フ